

## 日本の経営思想と稲盛和夫（1）—石門心学と稲盛和夫—

吉田 健一（鹿児島大学 稲盛アカデミー・准教授）

## Japanese Management Thought and Inamori Kazuo(1)

## — Sekimonsingaku and Inamori Kazuo —

YOSHIDA Kenichi

キーワード：『都鄙問答』、石門心学、労働即仏行、労働観、利益観

## はじめに

本稿は江戸時代の思想家である石田梅岩（1685年～1744年）と現代の経営者稲盛和夫（1932年～）の思想を比較検討するものである<sup>1</sup>。時代背景も政治体制も科学技術の発達度合いも、資本主義の成熟度も全く違う江戸時代初期の人物と現代の人物の持つ思想を同列に比較するのはそもそも無理があることは論をまたない。

だが、本稿では現代の稲盛和夫（以下、稲盛）を石田梅岩（以下、梅岩）以来の日本に特有の資本主義思想を体現する人物の系譜の最前線にいる人物との位置づけをした上で、時代を超えて通じる両者の思想を比較し、その共通点と相違点について考察する。

周知のように、後年、石門心学と呼ばれる思想を展開した梅岩は、今日、日本の資本主義思想の祖といわれることが多い。実際には、後にみるように梅岩は商人道徳のみを説いた人物ではないが、今日では広く商人の道徳を説いた人物として知られており、日本の思想史上そのように位置付ける見方がよくなされる。

一方、稲盛は現代の日本社会において「哲学」を説く経営者として有名である。稲盛より前、戦後の日本には「経営の神様」松下幸之助（1894年～1989年）が活躍し、松下の提唱したPHP運動などもある意味においては、現代の石門心学ともいべきものであった。松下と稲盛の両者とも現代日本において「哲学」を説く経営者としては双壁であるが<sup>2</sup>2人の思想は、週れば梅岩の石門心学（とそれに先立つ鈴木正三の思想）以来の日本資本主義の精神<sup>3</sup>ともいべきものを戦後日本と現代日本にお

<sup>1</sup> 筆者は過去に「石田梅岩と稲盛和夫の思想—石門心学思想の今日的意義と稲盛哲学との比較—」（鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要 第2号・2010年12月）と「近代日本の経営思想とその特徴—労働観・利益観を中心として—」（鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要 第4号・2012年12月）とのタイトルの論文を執筆している。本稿は基本的には、新たに執筆し直した。しかし、一部分はこれらの論文から転用した。「はじめに」と「おわりに」部分は「石田梅岩と稲盛和夫の思想」の「はじめに」と「おわりに」をベースにして加筆修正した。また4章2節「稲盛和夫による梅岩への言及」部分は「近代日本の経営思想とその特徴」の第4章第3説を基に、第5章「稲盛和夫の思想と石門心学の共通点—利益観と労働観—」部分は同じ論文の第4章第4節を基に加筆・削除、修正した。

<sup>2</sup> 両者の「哲学」を比較した論考としては、川上恒雄「松下幸之助と稲盛和夫—その「哲学」の比較」（『論叢松下幸之助』第14号 2010年4月）がある。

<sup>3</sup> 山本七平は『日本資本主義の精神』（ビジネス社・2006年、初刊本は1982年）や『勤勉の哲学—日本人を動かす原理その2—』（祥伝社・2008年、初刊本は1979年）などで、日本資本主義の本質について詳細に分析している。山本によれば、鈴木正三—石田梅岩に日本人の根源的労働観をみる事が出来るという。確かに鈴木正三—石田梅岩と続く労働観や経営観は戦後の松下幸之助や稲盛の説く所と共通点が多い。

いて体現したものと見ることも出来る。

本稿においては、日本型資本主義思想の祖である梅岩と現代における体現者である稲盛の思想を時代と空間を超えてその核となる部分を比較し、類似点と相違点を検討することとしたい。だが、本稿では後に触れるが、梅岩と稲盛の比較は試みるが、梅岩の思想全体と稲盛の思想全体を対比して比較するものではない。

それは稲盛の経営の一部には梅岩の思想が影響を与えてはいるが、稲盛は梅岩以外からも多大な影響を受け、むしろ全体としてみればその方が大きいからである。従って比較は試みるものの、現代の稲盛の中に江戸時代の梅岩の思想を見るという見方をした後に、梅岩との相違点も確認し、稲盛の説く哲学における梅岩的なものの今日的意義を確認したい。

「断章取義」という言葉がある。「断章取義」とは、「書物や詩を引用するときなどに、その一部だけを取り出して自分の都合のいいように解釈すること」である。「章」とは文章や詩文の一編を指す。「断章」とは文章の一部を取り出すことである。「取義」はその意味をとるという意味である。出典は古代中国の『春秋左氏伝』<sup>4</sup>である。

本稿の最初にこのようなことを書くこと自体に問題があるかもしれないが、実をいえば、そもそも稲盛の書物自体が多くの面で「断章取義」の要素が強い。そして、山本七平<sup>5</sup>が論じているが石田梅岩の石門心学自体が「断章取義」の性質が強い。その意味においては、本稿で論じる梅岩と稲盛の二人ともがその著作では「断章取義」の手法を使っている。

元々、「断章取義」という言葉には、自身の主張を強化するために、原点の意味に関係なく、先人の言葉を都合よく引用するというマイナスの意味あいがある。だが、その手法をとるものの全てにオリジナリティがないというわけでもない。先人の著作や表現からの引用をする人物自身にもかなりの比率でオリジナリティがあり、その論者の「言いたいこと」が先に明確にある場合には、先人の思想や表現を自身の言いたいことのために引用することは、大きな批判を受けることではないだろう。本稿自体も稲盛と梅岩の共通点を見出すという目的が先にあり、稲盛の発言と梅岩との共通点を見出すために「断章取義」の手法をとっている。

## 1. 石田梅岩と石門心学

### (1) 石田梅岩の生涯と石門心学の歴史

最初に石門心学の開祖といわれている石田梅岩の生涯と石門心学の歴史を概観しておきたい。梅岩の伝記としては、梅岩の死後に門弟らによって編纂された『石田先生事績』が長く唯一の典拠とされてきたが、1934（昭和9）年に岩内誠一が著した『教育家としての石田梅岩』によって、多くの事実が明らかになったとされている（柴田実、1962年、1頁）。

<sup>4</sup> 『春秋左氏伝』は孔子の編纂と伝えられている『春秋』の代表的な注釈書。紀元前700年頃から、約250年の魯国の歴史が書かれている。『左伝』、『春秋左氏』、『左氏伝』ともいわれる。

<sup>5</sup> 山本七平は評論家、山本書店店主。1921（大正10）年～1991（平成3）年。太平洋戦争後、保守系もマスメディアで活躍した。日本文化、日本社会、日本人論を数多く発表した。『空気の研究』などが代表的な著作。業績の全体を総称して「山本学」と呼ばれる。

本節においては、柴田実『石田梅岩』（吉川弘文館・1962年）の中の年譜及び本文を参考にして、梅岩の生涯を簡潔に記述していく。梅岩は旧暦の1685（貞享2）年9月15日、丹波郡桑田村に生まれる。現在の京都府亀岡市にあたる。梅岩の名前は興長といい、子どもの時の名前は勘平といった。11歳の時に初めて京都に出て商家に奉公したといわれている。その奉公先には4、5年奉公して一度、郷里に戻ったとされる。

1707（宝永4）年、梅岩は23歳の時に再び京に上って商家黒柳家に奉公した。黒柳家の家業は明らかではないとされる。当時は奉公に上がるのは14歳くらいまでの少年で数年の丁稚の期間をへて、手代、番頭となり、暖簾分けをしてもらい独立した商人になるのが決まったコースであり、20歳を過ぎてから奉公に上がるのは、年季奉公をへての暖簾分けが期待できない状況だったようである。

柴田によれば、このことに関係があったのかどうかは分からないが、梅岩はこの頃から神道への関心が強かったとのことである（柴田、1962年、13頁-14頁）。1727（享保12）年、梅岩は43歳の時に小栗了雲について学ぶ。了雲の名は正順、通称を源五郎といった。了雲の学問や思想については、著書などが残っていないので、十分に明らかにすることは困難なようだが、『事績』の附録である「姓名爵里」に「嘗て性理の蘊奥を究め、且積老の学に通じ」とあるという（柴田、1962年、41頁）。

この「性理の蘊奥を究む」ということについて、柴田は「主として朱子学を修めたことを意味するのはいうまでもないが、積老の学に通じたというのは、後に説くように梅岩を導いて開悟に至らしめた方法のすこぶる禅の提撕（ていせい）に似るところがあるのと、かれが終始市井の隠者的生活を送っていた事実によって裏付けられるであろう」（柴田、1962年、41頁）と述べている。了雲の基本的な思想は儒学（朱子学）と仏教であった。

梅岩はそれまで自分で自身の思想を深めていたが、了雲との出会いによって、さらに自身の思想を深めていった。了雲との出会いの2年後、45歳の時、1729（享保14）年に京都の車屋町御池上がるにおいて、初めて講義を行った。この時から梅岩は世の人々に対して自身の思想を説くこととなる。門前には「聴講料をとらず、紹介を必要とせず、誰でも全く自由に聴聞できる」という内容の書付を掲げた（柴田、1962年、57頁）。当時、その書付をみた人の中には、殊勝だとほめる人もあれば、無学な人間が何を説くのかと誹る人もあったといわれている。この宅での講義は毎朝、隔夜に続けられたという。1735（享保20）年10月、51歳の時には、門人の要請によって京都の高倉通錦上るにあった大長屋において1か月の講義を行った。この時は聴衆の男女が群れをなしたといわれている。最初に梅岩が自宅で講義を開始してから8年目であった。

1738（元文3）年、54歳の時、梅岩は4月下旬から5月上旬まで門人数人と城崎温泉で『都鄙問答』の校訂にあたった。梅岩の主著である『都鄙問答』の内容については後の節で紹介する。翌1739（元文4）年7月、『都鄙問答』が刊行された。1740（元文5）年12月には門人と一緒に京都市中の貧窮者に施行を行った。1743（寛保3）年、『都鄙問答』を北野社（北野天満宮）に奉獻した。1744（延享元）年5月には『齊家論』を刊行し、9月24日に60歳でなくなった<sup>6</sup>。石門心学の祖は梅岩であるが、梅

<sup>6</sup> 石田梅岩の生涯についての記述は全て柴田実『石田梅岩』（吉川弘文館・1962年）を参考にして記した。

岩自身が自らの思想体系を石門心学と名付けたわけではなかった。梅岩本人の存命中にも最盛期には門人は400名にも上ったといわれている。梅岩は終生、妻帯することなく自炊生活を送っていた。弟子の中から京都の呉服商人の手島堵庵(1718年～1786年)や『鳩翁道話』を記した柴田鳩翁(1783年～1839年)などが輩出された。

石門心学が全国的に広まっていったのは梅岩の弟子の手島堵庵の活躍によるものであった。梅岩の思想はその死後、半世紀ほどの間に急速に一般社会に普及した。そして明和・安永から天明・寛政期(18世紀末)には社会的な一大勢力に発展した。これは手島堵庵の弟子の中沢道二(1725～1903)やその養嗣の活躍が直接の原因となっているが、基礎を作ったのは堵庵だったといわれている(柴田、1964年、147頁)。心学という言葉が広く普及したのは弟子たちが広めて以降である。

## (2) 石門心学思想の特徴

さて、石門心学思想の特徴とはどのようなものであろうか。最も分かり易い説明をすれば、石門心学とは日本の江戸時代中期の石田梅岩を始祖とする倫理学の一派であり、庶民のために平易に説かれた道徳的な徳目であるということである。

単に「心学」と呼ばれることもあるが、中国の陽明学も「心学」と呼ばれることから、陽明学と区別するために石田梅岩が説き始めたという意味で「石門心学」と呼ばれるようになっていった。その思想の特徴は神道・儒学(儒教)・仏教の三教合一が基盤とされ、「正直の徳」を最も尊重している。一般的には梅岩の思想は商業の社会的意義を説き、商人の支持を集めたと理解されている。

また、日本で最初に企業の社会的責任(CSR=Corporate Social Responsibility)を明らかにした人物などと紹介されることもある。梅岩は一般的には商業道徳や企業の社会的責任を説いた人物として、紹介されることが多く、また時代が異なるが梅岩の特徴を分かりやすく解説するために『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』<sup>7</sup>を記したマックス・ウェーバー<sup>8</sup>の日本版というような感じでとらえられていることもある。

なぜ、M・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と梅岩の思想が比較されるのであろうか。これは、ウェーバーが「人は天職に励むことによって天国にいける」というプロテスタンティズムの教義が資本主義の発展につながったとしていることに対し、梅岩が江戸時代に説いた思想が日本の資本主義発展の基礎となったという見方が思想研究家の中にあるからである。だが、梅岩は実際にはウェーバーのように日本の近代資本主義発展の要素を分析した人物というわけではない。

梅岩の場合はそれまでの日本社会にあった仏教と儒学(朱子学)から派生した道徳を人々が実際

<sup>7</sup> 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』はドイツの社会学者マックス・ヴェーバーによって1904年から1905年に著された著作。プロテスタントの禁欲主義が資本主義の精神に適合性を持っていたと分析し、近代資本主義の成立を論じた著作。その内容は、もともとプロテスタンティズムは禁欲主義であったが、最初から利潤を得ることを目的とするのではなく、天職に勤勉に励んだ結果、利潤を得ることは、隣人愛の実践の結果であることから神の御心に叶っており、金儲けに否定的な宗教が、結果として近代資本主義を生み出したとするものである。

<sup>8</sup> マックス・ウェーバーはドイツの政治学者、社会学者、経済学者。1864年～1920年。代表的な業績は『職業としての政治』(講演)、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』など。

の日々の仕事に活かすことを人々に説いた。その対象の多くは町人であったことから、梅岩は商人に対して商業の意義を説くこととなった。その意味からは、梅岩の思想を構成する要素となった仏教や朱子学からくる日本の人々に広範に広まっていた思想そのものがウェーバーの分析したプロテスタンティズムの思想に対応するといった方が正確であろう。

しかし、梅岩は決して『都鄙問答』の中で、商業道徳のみを説いたわけではない。本節では石川謙『石田梅岩と『都鄙問答』』（岩波新書・1968年）を参考に、梅岩の思想の特徴を確認しておく。石川によれば、梅岩においては「その歩いた人生行路の足跡と、掘り下げていった思想の特質と深まりとが、つねに並行して」（石川、1968年、9頁）おり、思想の内容は「一口にいえば、この世の中に、悔いなく悩みもなく生きるための学問でもありましたから、修行しぬいた後に、もう一度、世間の中に戻って、世間とともに楽しむ暮らしをするのがねらい」（石川、1968年、9頁）であったという。

以下は石川の『石門心学と『都鄙問答』』によるものだが、石門心学の特徴は次の通りである。ただし、表現については筆者が分かりやすく直した。

- （1）心学の基本原理は天と人、宇宙と人類との間の価値や交渉が問題である。
- （2）天は自然（無心）であるが、それでいて、万物を産み育てる働きをもっており、この点から見ると、万物に生きて働く方向を示す理念でもある。
- （3）したがって、実在ながら規範である天は、理とも性とも道（天道）とも呼ぶことができるが、それが人間や万物に住み込んで、万物相互、人間相互、人間と万物との間に交渉、接触がおこるに及んで、心となって現れる。
- （4）心は一方では天につながり、性につながりながら、他方では人間や万物の形に規制せられ、お互い同士の交渉、接触にひかれる。
- （5）だからこそ人間は、心をもって性をやしなうのが、一生を通しての本務である…ということである（石川、1968年、189頁）。

このことだけを見れば、どこに商人道徳のあり方が出てくるのだろうかという感じを受ける。ここまで見るだけであれば、儒学（朱子学）的な世界観が展開されているだけであり、商人の社会的役割などは全く出てこない。梅岩の思想はまず順番として、基本として天と人間の関係を説くものである。つまり、いきなり人の道を説くというものではなかった。

では朱子学の影響を強く受けていた梅岩が具体的な人々の生き方を説いたのはどのような方法によってであろうか。そのキーワードに「形に由るの心」というものがあつた。「形に由るの心」というものが『都鄙問答』では繰り返して説かれている。これは梅岩が天や理や性というものを探求する哲学、先験的な面、形而上学的な面を重視したからである。しかし、一方において梅岩は経験世界における具体的な道義、道徳の実践にも力をいれた。

この先験的な原理と経験的な道義、法、道とを結びつける媒介者の役割を果たすのが「形に由るの心」だった（石川、1968年、118頁）。たとえば「誠は天の道」というものが出てくるが、これを人間社会で実現して、「誠にする」ためには人間社会に存在する道にまでおろしてくる必要があるとされる（石川、1968年、118頁）。分かりやすくいえば、梅岩の思想はまず天と人との関係を説き、

そして人の生き方を考え、その後、それぞれの職業についている人々が具体的にどのような心構えで仕事をすべきかを説いたということである。

## 2. 『都鄙問答』にみる石田梅岩の思想

### (1) 『都鄙問答』の構成

梅岩の主著は『都鄙問答』と『齋家論』であるが、ここでは『都鄙問答』の構成をみておきたい。江戸時代の後期には心学教学自体が目覚ましい勢いで全国に広がり『都鄙問答』も普及していった。段の数は全部で16段である。段とは現代の本の章にあたるものである。『都鄙問答』の目次は以下の通りである。以下の記述は岩波文庫版『都鄙問答』(1935年)による。なお本稿では、読みやすくするために旧字は筆者が新字に改めた。

#### 卷の一

「都鄙問答の段」、「孝の道を問の段」、「武士の道を問の段」、「商人の道を問の段」、「播州の人文問の事を問の段」

#### 卷の二

「鬼神を遠と云事を問の段」、「禅僧俗家の殺生を譏の段」、「或人親へ仕之事を問之段」、「或学者商人の学問を譏の段」

#### 卷の三

「性理問答の段」

#### 卷の四

「学者行状心得難きを問の段」、「浄土宗之僧念仏を勸之段」、「或人神詣を問の段」、「医の志を問の段」、「或人主人行状の是非を問の段」、「或人天地開闢の説を譏の段」である。

以下、石川謙の著作を参考にして記述して行くが、『都鄙問答』の中の課題ごとの段の数と全体に占める割合は次の通りである。「性理の原理」が2段で28.95パーセント、「具体的な題目ながら性理の説明を主としたもの」が3段で11.40パーセント、「孝」が2段で12.28パーセント、「職分・職業に即する道」が5段で36.84パーセント、「儒仏における一致点・差異点」が2段で6.14パーセント、「神詣に関する習俗」が2段で4.39パーセントとなっている。この本は4巻16段からできており、総丁数は114丁である(1丁は2頁にあたる)(石川、1968年、31頁-32頁)。

このように見れば分かるが、社会の中の職業・職分について説かれた段は5つある。そして、心構えの説かれている対象である職業は武士・医師・商人の3つに分かれている。このうち梅岩は武士と医師については、自分自身はその仕事の経験がないということから短く記しており、商人の道については自分自身が商人であったことから、3段36丁の記述がある。この本では全体の40パーセント強が「性」についての探求に充てられている。「性」とは人間の本性のことであり、儒学と仏教から見た人間の本性について説かれている。これがこの書物の一本の柱である。もう一本の柱が

職分・職業について説かれた部分である。まずはこの書物は大きくは2つの柱から成り立っているということを押さえておきたい。そして儒学と仏教の一致点と差異を説いた段が2つ、神社参詣についての習俗を批判した段が2つある。

『都鄙問答』全体の中で、職分・職業に即する道についての記述は書物全体の4割弱である。また、その中の内訳は武士と医師が合わせて2段で6丁（12頁）であるのに対して、商人についての記述は3段で36丁（72頁）もある。職分・職業についての部分は、約85パーセントが商人についての記述である。このことから商人について説かれている部分は本全体の4割のうちのさらに85パーセント程度であるから、本全体の35パーセント程度が商人のあり方について説かれているということになる。この商人に対して論じた部分の比率の高さから、後の梅岩に対する江戸時代に商人の道徳を説いた人物というイメージが広く形成されていった。

## （2）商人の道とは何か

それでは次に『都鄙問答』の中で梅岩によって説かれている商人の道について、その概略を見ておきたい。『都鄙問答』中では、「商人ノ道を問ノ段」（巻之4）、「或学者商人ノ学問ヲ譏ノ段」（巻之2）、「或人主人行状ノ是非ヲ問ノ段」（巻之4）の3つの段で商売とは何かということと商人のあり方について論じられている。『都鄙問答』は梅岩が一人で著述した書物ではなく、弟子とのやり取りを取録したものである。

まず以下に石川の著書から「商人ノ道を問ノ段」のやり取りを紹介していく。問答にでてくる商人が「売買を、つねにわが身の仕事としながら、商人の道に叶うにはどうしたらよいか、しっかりと掴めません。何を主にして売買渡世をしたらよいのでしょうか」（石川、1968年、157頁）と根本的な問いを梅岩に発する。梅岩が活躍したのは18世紀前半で、日本でいえば享保の頃にあたる。今から約300年ほど前であるが、この頃、京都の商人の中には商売という仕事そのものの本質について考え、自分の職業についての反省する人々が出てきたようであった。

梅岩はこの問いに対して「商売というものの始めは、その昔、余りある品物を、不足する品と交換して、たがいに融通しあったのが本であるという」（石川、1968年、157頁-158頁）と回答する。まず梅岩は商売の根本的な機能、意義を説いた上で、次に商売の基本原則を説いていく。「商人は勘定くわしくして、今日の渡世をするものであるから、一銭の銭といえども、軽く取り扱ってはならぬ。精しく正確に取り扱って富をなすのが、商人の道である」（石川、1968年、158頁）。この部分では梅岩の商売というものへの基本的な考え方、商人のあるべき姿というものが説かれている。

梅岩が最初に町人に対して自宅で講義を始めたのは、先に見たように1729（享保14）年、45歳の時であった。梅岩は自分自身が商人であったことから、商人の社会的役割を積極的に評価し、商業が盛んになることを望んでいた。しかし、当時は不道徳な商人もいたようであり、梅岩は商人も学問を修めて正義の観念を身につけなければならないという考え方をもっていた。この辺りのことは「或学者、商人ノ学問ヲ譏ノ段」で論じられている。以下も石川の著書からこのやり取りを紹介する。

梅岩が商人の意識すべき倫理を説いたのに対して、「或る学者」は「お前は、性理を知れば、時の宜しきに合うと言うが、それはわがためによいのか、他人のためによいのか」（石川、1968年、161頁）と質問する。この「性理を知る」というのは、人間の本性（本性）から考えて、人の生きるべき道を知ることであり、梅岩はこのことを悟れば、商人は自然に時宜に合った商売をすることができるという説いた。

これに対して「或る学者」は、それはわがため（商売人）にとって良いことなのか、他人（客）にとって良いことなのかという質問（反論）をしたのである。「或る学者」は「双方ともによろしいなどということは、あり得ない。（中略）お前によければ、わたしに悪い。また奉公人を召し抱えて、役目をふり当てるのに、同じ日に来た同年輩のものを、同じ方面の役目につける時にも、一方を上立て、他方を下におくより外に途があるまい。上に立った方はよかるうが、下におかれた方には不満があろう。こうした例から見ても、双方ともに善いことはありえまい」（石川、1968年、161頁）とも述べる。

これに対して梅岩は奉公人の問題については、「同じ器量なら門口に先に入ったものを上にたて、器量に違いがあれば、器量のすぐれた方を上に立てる」と回答した（石川、1968年、161頁-162頁）。この問答の中で「或る学者」は梅岩に対し、商人について「貪ることを仕事にしている商人に、無欲を説く学問を教えるのは、猫に鯉の番をさせるようなものだ。つじつまが合わぬことをするお前は曲者ではないか」と述べる（石川、1968年、165頁）。これに対して梅岩は「商人の道を知らなければ、貪ることに勉めて、家を滅ぼす。商人の道を知ると、欲心を離れ、仁心を以て勉め、道に合っただけで栄えるのが、学問の徳である」（石川、1968年、165頁）と答えている。

しかし、「或る学者」はこの梅岩の回答に納得がいかなかったようであり、さらに「では、売物に利をとらず、元金で売り渡すように教えるのか。利欲のない商人など、聞いたことがない」と述べる（石川、1968年、165頁）。それに対して梅岩は「君に仕えるもので、禄を受けずに仕えるものがあるだろうか」と答える。これには「或る学者」も「それはあるまい。孔子孟子といえども『禄を受けざるものは、礼に非ず』といわれている。受ける道があつて受ける禄は、受けたからといって欲心とは言わぬ」と答える（石川、165頁-166頁）。

「或る学者商人ノ学問ヲ譏ノ段」のやり取りの紹介はこの辺りにするが、重要なことは梅岩が商人の利益を武士が主君から受ける俸禄と同じものだという考え方を表明した部分である。これが後に梅岩が商人の社会的役割、商業の社会的意義を最初に説いた人物と評されることになっていく理由である。それまで商人の得る利益というものについて、儒学者などによっては正面から論じられていない中、商人でありながら独学で儒学を学んだ梅岩は商人がお客から得る利益をより広く社会から得る報酬ととらえ、武士が主君に仕えることによって得る俸禄と同じ性質のものだと論じたのであった。

ここに紹介した問答に出てきた「或る学者」はおそらく京都に住んでいた民間の儒学者であろう。問答に「孔子孟子といえども『禄を受けざるものは、礼に非ず』といわれている」とあるところから、この「或る学者」は無名の市井の学者だったとしても『論語』や『孟子』を読んでいたと推察され

る。また、儒学者の中に商人を軽く見る風潮があったことがこの問答からも垣間見ることができる。

しかし、梅岩自身は士農工商を階級の上下とはとらえずに、社会が成り立っていくために必要な役割分担にすぎないと考えていた。これは次の梅岩の発言から理解できる。梅岩は「士農工商ハ天下ノ治ル相トナル。四民カケテハ助け無カルベシ。四民ヲ治メ玉フハ君ノ職ナリ。君ヲ相クルハ四民ノ職分ナリ。士ハ元来位アル臣ナリ。農人ハ草莽ノ臣ナリ。商工ハ市井ノ臣ナリ」（『都鄙問答』）と述べているが、四民が欠けては世の中が成り立たず、君主は市民を治める職であるが、君主を助けるのが市民の職分であると説いている。そして、梅岩は四民は役割分担が違うだけでそこに上下の身分関係はないという考え方をもっていた。

「或る学者」との問答で見たように、儒学者（知識人）の中にあつた商売と商人への偏見を、自身も商人である梅岩が学問（儒学）を学び町人（商人）に人の道を説き始めたということは画期的なことであった。大げさにいえば、梅岩が商人の社会的意義を世間に向けて説きつつ、一方で商人にも学問（倫理・道徳）が必要であるということ説き始めたということは、元禄から享保年間（元禄－宝永－正徳－享保の順）には、江戸・京・大坂などの都市部においては市民社会の芽生えが始まっていたということであろう。

### （3）商人にとって利益とは何か

では次に商人の利益について、梅岩がどのように考えていたかをもう少し詳しく見ておきたい。商人の利益を武士の俸禄と同等なものだと論じた梅岩であったが、これは「商人の買（売）利ハ士ノ禄ニ同ジ。買利ナクバ、士ノ禄ナクシテ事フルガ如シ」（『都鄙問答』）という有名な言葉に現れている。

商人の得る利益は武士の禄と同じであつて、商人にとって利益がないのは、武士が禄をもらわずに主君に仕えるのと同じことだと述べたのである。それでは梅岩はその商人の利益はどのようにあるべきだと考えていたのだろうか。この点については、梅岩は利益を得るにもその心構えと基準が必要だと考えていた。梅岩は品物の品質と値段のつけかたに対する正直と、買い手の身になって売る思いやりが、商人にとっての「真実」であり、この「真実」こそが商人にとっての生命であると考えていた（石川、1968年、166頁）。

そして、「コノ味ハ、学問ノ力ナクテハ、知レザル所ナリ。然ルヨ商人ハ学問ハイラヌモノト云ヒテ嫌ヒ用ヒザルハ、如何ナルコトゾヤ」（『都鄙問答』）と述べ、このことは学問の力がなければ知ることができないことであり、商人にこそ学問が必要であると説いた。そして、梅岩は商人に対して商人の道があるということを自分は教えているということ。「我が教ユルトコロハ、商人ニ商人ノ道アルコトヲ教ユルナリ。全ク士農工ノコトヲ教ユルニハアラス」（『都鄙問答』）と「或る学者」を相手に述べている。

以下に梅岩の利益に関しての考え方をいくつか見ておきたい。

「二重ノ利ヲ取り、二枘ノ真似ヲシ、密密ノ礼銀ヲ請ルコトナドハ、危フシテ浮ル雲ノ如クニ思ベシ。コレヲ能ク能クツツシムハ、タダ学問ノ力ナリ」（『都鄙問答』）。

ここで梅岩は、「二重の利益を取って、秘密で礼金を受け取るようなことは、危険で浮雲のよう

なものだと思ふべきであり、これを慎むことができるのは、ただ学問の力である」と説いている。ここでいう学問とは、商売の仕方や実利的な学問のことではなく、人の道のことであり儒学のことである。これは、現代風にいえば倫理学・道徳のことである。梅岩は町人が学問をしないことによって、倫理にもとるようなことをしていた当時の風潮を批判的に見ている。

「一升ノ水ニ、油一滴入ルル時ハ、ソノ一升ノ水、一面ニ油ノ如クニ見ユ。ココヲ以テコノ水用ニ立タズ。売買ノ利モ是ノ如シ。百目ノ不義ノ金ガ九百目ノ金ヲ皆不義ノ金ニスルナリ」(『都鄙問答』)。

ここでは「一升の水に一滴油を入れれば、その一升の水は一面、油のように見える。このことをもってこの水は役に立たない。売買の利益もこの通りである。百目の不正な金が九百目の金を全て不正な金にするのである」と説いている。これは、不正は少しの金額なら良いというものではなく、少しでも不正をして儲けた金があれば、その利益は全て不正な利益となるという考え方である。この部分には梅岩の極めて厳しい倫理観を見ることができる。

このように、梅岩はある種の悪徳商人を厳しく戒めているのだが、梅岩自身はあくまでも商人である。儒学を学んだ梅岩であるが、儒者の立場から商人を貶めているのではない。当然ながら一方で梅岩は商人の得る利潤を肯定している。それは次の一文に強く表れている。

「汝独売買ノ利バカリヲ欲心ニテ道ナシト云ヒ、商人ヲ悪シテ断絶セントス。何ヲ以テ商人計リヲ賤シメ嫌フコトゾヤ。汝今ニテモ売買ノ利ハ渡サズト云テ利ヲ引キテ渡サバ天下ノ法破リトナルベシ」(『都鄙問答』)。

梅岩は商人を卑しむ相手に対して、「あなた(汝)は商人は利益のことばかりを考えておいて欲心ばかりであり道がないといい、商人を憎んで断絶しようとしている。なぜ、商人ばかりを卑しめて嫌うのか。あなた(汝)は今も売買の利益は渡さないといっている。利益を引いて(品物を)渡せば天下(世の中)の掟を破ることになる」と述べている。

これは先に見た「或る学者」との問答の初めの方の部分であるが、商人が正当な利益を得ることまでが、卑しいことだとされている風潮に対して、梅岩が強い怒りをもっていたことがこの問答から理解できる。梅岩の思想は端的に言えばそれまで社会的に低く見られてきた商人と商売の意義を社会に説くとともに、現状の商人の側にも多くの問題があり、商人が儒学者や武士から批判されないようにするためには商人も学問をすべきというものであった。

梅岩がこのようなことを説いたのは、江戸時代の元禄時代以降に都市部を中心に市場経済が発展してくるまで、日本において、商売というものの社会における位置や商人について、儒学や仏教を修めた上で、その社会的意義を明らかにした人物がいなかったからである。

儒学(朱子学以前のものも含めて)は人の道を説くものではあるが、基本は「修己治人」の学問である。己の内面を修めたものが(修己)、人を治める(治人)というのが儒学の基本である。己を修めることができたものが君子(聖人)であり、君子が社会を治めるべきであるというのが儒学の根本的な思想である。これは中国でも日本でも変わらない。その意味で一部を除いて儒学は商人には無縁の学問であった。

しかし、その儒学も元々は孔子の言行録である『論語』から始まっている。『論語』は人の道を説くものであり、統治者（為政者）のためだけに説かれたものではない。今日でも『論語』に説かれていることは万人が読むべき（読むことのできる）内容であり、『論語』は統治者（為政者）に対してだけ説かれた書物ではない。そして、本当は封建道德のイメージが強い朱子学でさえも、その基本は人間と天の関係を説くものであった（これが性理の学の部分）。

だが現実には中国でも朝鮮でも日本でも儒学（とりわけ朱子学）は統治階級の「修己治人」の学としてのみ学ばれてきた。日本では特に徳川家康が朱子学を幕府の官学として以降は武士に積極的に学ばれた。商人が「己を修め」て、社会全般のために「善き商売をするため」に四書を読むという意味あいでの読まれ方は中国や朝鮮はもちろんのこと、日本でも梅岩が登場するまでにはなされなかった。その意味では、梅岩が商人でありながら儒学を学び、商人にも学問（儒学）が必要であると説いたことは日本の歴史上、極めて大きな意味をもつことであった。

### 3. 日本人の労働観と石門心学

#### （1）山本七平による解釈－鈴木正三と石田梅岩－

ここで評論家山本七平が梅岩が歴史上果たした役割について、どのように評価しているかを見てみよう。山本は日本の文化と社会を独自の手法で分析した評論家として知られ、その論考は「山本学」とも称され、多くの読者を獲得し論壇にも大きな影響を与えた。山本には梅岩を扱った書物に『勤勉の哲学－日本人を動かす原理・その2－』（祥伝社・2008年）、『日本資本主義の精神』（ビジネス社・2006年）などがある。

山本は『勤勉の哲学』の中で日本の資本主義を形作った思想家として二人の人物を挙げている。一人は鈴木正三<sup>9</sup>であり、もう一人が梅岩である。正三は江戸時代の禅僧であるが、元々は武士であった。正三には『盲安杖』、『万民徳用』、『破切支丹』という主要な著作があり、仏教的色彩が濃いものに『籠草分』などがある。主著とされているのが『驢鞍橋』であるがこれは弟子の恵中による覚書である（山本、2008年、68頁）。正三は一言でいえば、「仕事＝宗教的修行」という思想を説いた人物である。

山本は正三を「日本的資本主義の精神的源泉」としている。『「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という言葉の日本的用法は、おそらくその原意を離れて、この言葉自体が一人歩きをしていると思われる。日本の資本主義の急激な経済的発展はプロテスタンティズムと無関係なことは言うまでもない。『日本的資本主義』の精神的源泉を求めるとすれば、それはむしろ日本の伝統に求むべきであり、その精神的基盤を明らかにしている者として、まずこの正三があげられるべきである」（山本、2008年、96頁）と評価している。正三自身は、元は武士であり出家して禅僧となったが、それぞれの職に励むことが仏行修行であるという思想を日本で初めて世に説いた人物である。

<sup>9</sup> 鈴木正三は江戸時代初期の曹洞宗の僧侶。1579年～1655年。元は徳川家に仕えた旗本。元々、武士だったことからより在家に近い立場で思索した。

山本はさらに「その発想の基本は農人日用に現れているが、他とも共通する大きな特徴は、『世俗的行為は宗教的行為である』という発想であろう。(中略)『農業即仏行なり』、『何の事業も皆仏なり』である。なぜなら『士農工商』といった分業は『本覚真如の一仏、百億分身して、世界を利益したもう』ためであり、各人は『先世の業因』でその位置に生まれて来た責任があるのだから、武士は秩序維持、農人は食糧、職人は必要な品々の提供を、商人は流通をそれぞれ相当するのが宗教的義務になる。なお、『此外所有事実、出来て、世のため』となり、それが各人の職能であり、それに専念することが仏行だからである」(山本、2008年、97頁)と述べ、日本思想史上、正三の果たした役割を明らかにしている。

しかし、正三は農民、職人と商人とは少し分けて考えていた。農民が食糧を作ること、職人がものを作ることはそのことそれ自体が「仏行」であるのに対して、正三は商業はそれ自体をそのまま「仏行」とはしていなかった。正三の『四民日用』の中で「商人日用」も書いており、その中には「売買せん人は、先利得の益(ます)べき心づかひを修行すべし」とあり、そして、そのために修行すべき「心づかひ」とは「一筋に正直を学ぶべし」としている(山本、2008年、120頁)。

これは商人だけが欲によって実際以上の利益を出せるからである。正三は利潤追求を目的としてはならないとしている。山本も正三のような発想をすれば商業の場合は「農業即仏行」のように「流通業即ち仏行」とは規定できない面があることは否定できないと解説している(山本、2008年、126頁)。そして、正三は利潤を追求せずに流通に励めばそれが「善」であることまでは認め、この善が福德をもたらすことも認めているが、善には「有漏(煩惱のある状態)の善」と「無漏(煩惱のない境地)の善」があり、その善は「無漏の善」であってはならないと説いた(山本、2008年、126頁)。

正三と梅岩は生まれた時代も違い、生きた環境も全く違った。また正三の場合は主として仏典に自分の思想の拠り所を求め、梅岩の場合は主として儒学に典拠を求めていた部分も違う。しかし、明確な思想的な違いは商業への考え方であった。上述したように正三も商業を否定してはいなかったが、商人を農民、職人とは同列に並べてはいなかった。正三にとって、農業は即仏行であったが、商業(流通)は即仏行とはしなかったのは上述した通りである。これに対して梅岩は自身が商人であったことから、極めて商業を重視していた。ここが大きな違いである。

山本は梅岩の思想を「(前略)前述のようにその教えは実に広くかつ深く浸透し、ついに武士まで心学を学ぶに至った。皮肉なことに『町人の思想』が武士にまで及んだわけである。梅岩の思想はある意味では日本における『市民思想』のはじまりである。そしてその基本、すなわち世界観は現代もなお日本人の世界観の基になり、好むと好まざるとに拘らず、各人の思考と行動を規定している。この意味ではわれわれにとって最も重要な思想であるのに、明治以降、完全に無視されて現代に至った。(中略)自分たちの考え方、見方がその延長線上にあるという点は無視されてきた。(中略)言うまでもないが、今の時点で彼の思想を探求することは、単に思想史的な課題ではなく、現在のわれわれがもつ様々な問題を探求するためである」(山本、2008年、190頁)としている。

梅岩の思想は町民から出たものであったが、やがて町人から生まれた思想が武士にまで及んで行った。このことを山本は梅岩の思想をいわば日本における「市民思想」の始まりだったと高く評

働いている。これは厳然とした身分制度のあった江戸時代、その身分を階級ではなく社会を支えるために必要な役割分担に過ぎないとした点が新しかったということの意味しているであろう。そして、梅岩の思想は実は現在の我々に大きな影響を与えているにも関わらず、明治以来、日本社会で無視されてきたことの問題点を指摘し、「現在のわれわれがもつ様々な問題を探求するため」に梅岩の思想を探求することが必要だと述べている。

## （2）なぜ、資本主義の倫理が町人（商人）から出てきたのか

ではなぜ、町人（商人）であった梅岩から、資本主義の倫理ともいべき大きな思想が江戸時代に出てきたのであろうか。この問題について、もう少し山本の議論を参考にしながらこのことを考えていきたい。普通に考えてみても、武士や農民、または職人は直接、商売をしていなかったのも、商人であった梅岩から「資本主義の倫理」が提唱されたことはそれ程までには不可思議なことではない。本稿でも町人という言葉は何度か使ってきているが、厳密に言えば町人も「商」と「工」に分かれる。つまりは職人と商人に分かれるのである。そして、梅岩は町人の中の商人であった。

梅岩について山本は「彼は身分的には最下級の町人、しかも、そのなかでの中小商家の番頭にすぎない。彼が不思議な使命感に動かされて塾を開くことがなかったら、誰にも知られずに消え去った一番頭にすぎなかったであろう。その生涯は、商人として成功とは言いがたく、逸話として残るべき何ものもない、平凡な一生である」（山本、2006年、214頁）と述べている。確かにこれはこの通りであろう。ではなぜ、平凡な人生を送った一人の番頭から資本主義の倫理が出てきたのだろうか。以下は山本の議論を要約したものである（山本、2006年、215-219頁）が、なぜ、資本主義の倫理が町人（商人）から出てきたのかということについて考えてみたい。

なぜ、このような資本主義の倫理を説く思想が一介の商家の番頭から出てきたのかということである。確かに梅岩の思想は資本主義の倫理になりえる。しかし、山本は資本主義の倫理が一番頭にまで浸透するには、その前に資本の論理があったからだとする。資本の論理がないところに、資本主義の倫理も存在しないからである。そして、論理にはその底に公理がある。この公理は一言でいえば、「資本だけが利潤を生む」ということであった。これが社会に定着しないと、「資本の論理」などという言葉は通用しないからである。

もちろん、江戸時代には「資本」という言葉はなかったが、資本を意味する「銀親（かねおや）」という言葉があったということである。これは何か事業を始めるときに必要な資金のことである。そして、「資本だけが利潤を生む」という原則にふれた言葉は元禄時代の小説に至るところにでてくるのだという。これは、梅岩が登場する少し前の時代のことである。そして、山本によればこのように資本の力が強くなってきた日本において、2つの態度がでてきたという。

1つは「資本の論理と武士の論理」を絶対に相反するものとみる見方であった。そして、もう1つは「資本だけが利潤を生む」の公理を当然と認めつつも、どのようにすればこれを活用して一般社会に利益をもたらすことができるかという考え方であったという。梅岩の考え方は後者である。これは元禄という「資本の論理」が荒れ狂ったあとの反省によるものであった。これに対して、武士階級には公理

自体を認めない立場もあったという。これは「資本の論理と武士の論理」は相いれないという考え方があった。とはいえ、町人の方から梅岩のような思想が出てきたように、武士の方にも「資本の論理」は一応、認めつつ、これを武士による「統治の論理」に転換しようという発想もあった。

以上が山本の解説の概要である。これは大きく見れば、実際にこの通りであったろうと思われる。筆者もこの説明には特段の異論はない。つまりはそれまで（元禄時代まで）は、商人は政治的権力がなく経済的権力も持っていなかったのである。政治的な権力も経済的な権力もそれまでは貴族や武士などの統治階級が独占していた。もちろん、商人はいつの世の中でもいたが、経済力をもった商人が統治階級である貴族や武士を脅かすということは、江戸時代の太平の世の中が始まるまではなかったのである。戦国時代や安土桃山時代にも堺の町人などはおり、確かに町人は台頭しつつあった。だが町人が経済力で貴族や武士を凌駕することはなかった。

しかし、江戸時代が始まり元禄の頃になると、経済力では統治階級である武士をはるかに凌駕する商人がでてきた。これがいわゆる豪商である。大名も豪商から借金をすることとなる。このような社会においては、政治権力を持つものと経済的な実力を持っているものが分離していくこととなる。しかし、いくら経済的な実力を持っていても商人の身分は低かった。このように社会の統治階級である武士のもつ政治権力と実際に経済的な実力を持つ商人の関係に矛盾が生じることになったのである。

そして、元禄期には経済的な実力をもつ商人はかなり好き放題な振る舞いをしたのであった。そして、それに対して、商人は武士や知識人（儒者）からの批判を受けた。そのような状況の下で登場したのが梅岩だったのである。梅岩が「商人悪玉論」には激しく反発したのは本人が商人だったからだが、この「商人悪玉論」こそは武士や儒学者の側から出てきたものであった。一方において、梅岩は同業者である商人にも学問を学ぶことの必要性を厳しく説いた。これは学問（倫理）がないことによって、いかに商人が軽蔑され、嫌われているかも梅岩は実感として感じていたからであろう。

#### 4. 稲盛和夫による石門心学観

##### (1) 『京セラフィロソフィ』にみる稲盛和夫の労働観

以上、梅岩と石門心学の基本と梅岩の思想の果たした役割と時代背景について簡単に見てきた。本節からは石門心学と稲盛思想との関連を論じていきたい。それに先立って、稲盛の仕事観（労働観）を見ておく。稲盛は仕事（労働）とは修行であり、人格を形成するものとして重視しているが、人生における仕事というものの自体を稲盛がどう捉えているかを『京セラフィロソフィ』（サンマーク出版、2014年）の中から見ておきたい。

『京セラフィロソフィ』の中には「より良い仕事をする」という項目があり、その中には17個のフィロソフィがある。この中にはリーダーのあり方について説いた項目や仕事の進め方それ自体について説いている項目、日々の創意工夫の重要性を説いた項目もある。ここでは特に稲盛の仕事観や労働観の現れているものをいくつか確認しておきたい。

「仲間のために尽くす」という項目の中には「…この『仲間のために』ということは、『世のため

人のために』尽くすということに比べると狭い範囲の利他行ではありますが、たいへん大事なことです。世のため人のために、仲間のために尽くすというのは美しい心が行うものであり、またそれを行うことによってその人の心はさらに美しく、かつ純粹になっていきます。つまり、人格を向上させていくために、たいへん大事な行為であるわけです。（中略）また、『仲間のために尽くす』ということは、京セラのアメーバ経営の基盤を形成しています」（稲盛、2014年、82頁）とある。

ここで稲盛は仕事には仲間のために尽くすという面があり、それは利他行にも通じ、そのことを続けることは人格の向上にもつながると述べている。利他については別の章で論じるが、稲盛は仕事をするという行為にも利他的側面があるとして、この利他的な仕事をすることの重要性を説いている。これは仕事を自分のためだけにするのではなく、仲間のためや周囲の人のためにすることの重要性とともに、そのような心構えで仕事をすることによって、その人自身の人格向上につながるものとするものである。

これは先に確認した鈴木正三にも通じる仕事観である。稲盛の書物には梅岩は出てくるが正三は出てこない。だが仕事＝仏行、自身の仕事に励むこと＝仏道修行と考えた正三と稲盛には通じる部分がある。梅岩が儒学的であるのに対して正三が自身の思想を述べる際に、仏典を主たる典拠としていることについては、先に確認したところであるが、稲盛も利他、利他行という言葉で仕事の持つ意味を説く辺りは梅岩よりも、本人は意図していなかったとしても正三の系譜にあるという見方もできるだろう。

次に「真面目に一生懸命仕事に打ち込む」の解説部分を見ておきたい。この中には「仏教では悟りを開くということは、心を高める、人間性を向上させる、心を美しくすることと同義です。つまり、人間性が高まっていく、心が美しくなっていく、その最終、最高レベルを『悟りの境地』というわけです。その悟りを開くための方法として、お釈迦さまは『精進』ということを言われています。（中略）精進するということは、真面目に一生懸命に努めるということです。この、真面目に一生懸命に努めるということでその結果として報酬が得られるばかりではなく、その人の人間性が向上し、人格が高まり、心を美しくするという第二の効果が得られるのです」（稲盛、2014年、104頁）とある。

まさに稲盛は真面目に一生懸命、働くことイコール「精進」であり、これは人生の大きな修行であり、そのことが人格の向上をもたらすということをストレートに説いている。この部分は利他行との関連では論じられていないが、仕事に一生懸命に取り組むことそのこと自体に大きな意味があるという稲盛の仕事観・労働観が現れている。

同じ部分の解説では「真面目に一生懸命仕事に打ち込むこと、それは自分の人格、自分の人生をつくり上げるためにもたいへん重要なことです」（稲盛、2014年、110頁）とある。これはどういうことかといえば、仕事には楽しいこと、楽なことだけではなく苦しいことや嫌なことも含まれているからこそ、仕事に打ち込むことは修行であり、仕事は修行であるからこそ、人格が磨かれていくという考えである。

また「ものごとの本質を究める」の中でも「つまり、人格とは、仕事に打ち込むことによって身

についていくものであって、学問を修めたり本を読んだりして身につけていくものではないということです」(稲盛、2014年、134頁)とあるように、人格を高めるには学問をすることや机上で本を読むことではなく、実際に仕事をしなければならないということが説かれている。

本節で確認した稲盛の考え方は、「労働即仏行」観の現代版といっても良いだろう。梅岩よりもそれに先立つ正三が説いた考え方を現代に自身の「フィロソフィ」として蘇らせたのが稲盛である。また、この考え方は大きく2つの要素から成り立っていることが確認された。一つは労働(仕事)の中には仲間(他人)のために尽くすという利他的側面があり、これが仏行であるということである。仏行的な意味があるから、仲間のために尽くすことで人格が向上するとする。もう一つは仕事(労働)には苦しい側面があり、これは「精進」であるから、仕事に打ち込むことこそが、人生の修行という考え方である。

稲盛の労働観については、『働き方―「なぜ働くのか」「いかに働くのか」―』(三笠書房・2009年)でも詳しく述べられている。これについては次章でも改めて論じるが、本章においてはまず稲盛が「労働即仏行(修行)」といっても良い仕事観・労働観を持っていることを確認しておきたい。

## (2) 稲盛和夫による石田梅岩への言及

本節では稲盛に石門心学が与えた影響について考察する<sup>10</sup>。過去に稲盛自身が梅岩の思想について述べていることがあるので、ここではそれを紹介したい。本節で取り上げる梅岩についての稲盛の言説は、2000(平成12)年10月15日に国立京都国際会館で行われた「石田梅岩 心学開講270年記念シンポジウム」での発言である。

このシンポジウムの第1部では、カリフォルニア大学バークレー校名誉教授(元ハーバード大学教授)のロバート・N・ベラー<sup>11</sup>の講演「心学と21世紀の日本」が行われ、続いて第2部で「取り戻そう!日本人の忘れていた心と知恵―新しい資本主義と新しい個人主義―」というパネルディスカッションが行われた。パネリストはベラー、稲盛、上田正昭<sup>12</sup>、株式会社イトセイ会長小谷隆一であった。司会は上田で、最初に上田がベラーの講演を受けて、稲盛に対して石田梅岩あるいは石門心学を抱いている考えを問うた。

それに対し稲盛は、「(前略)…実は私が石田梅岩の思想に触れたのは、ちょうど会社をつくって事業家の端くれとして悪戦苦闘していた頃でした。日本では現在でも、社会的な通念では、企業家もしくは経営者、もっと言葉を崩して言いますと商人、商いをする人というのは、どちらかと言いますとあまり高い社会的地位には置かれてはおりません。やはり学者や文化人と称する人たち、または政治家・官僚といった人たちのほうが上で、私たち商人と言われる人間はいくらか卑しい人種として、少し見下げられたような状態が今日まで続いています。必死で努力し、仕事を通じて社会

<sup>10</sup> 本節の初出は「近代日本の経営思想とその特徴―労働観・利益観を中心として―」(鹿児島大学稲盛アカデミー紀要第4号:2012年12月)の中の第4章第3節「稲盛の石門心学観」である。

<sup>11</sup> アメリカの宗教社会学者。人文・社会科学を広く研究。代表的著書に『徳川時代の宗教』。カリフォルニア大学バークレー校、ハーバード大学教授を歴任。石門心学についての研究も行う。

<sup>12</sup> 歴史学者。京大名誉教授。大阪女子大名誉教授。日本古代史を中心に神話学・民俗学などを視野に入れ、東アジアの視点から歴史を究明する著書が多い。

に貢献しようと思っていた若い頃の私にとっては、それが大変苦痛でした。そのときに、石田梅岩が江戸時代に、商人というのは決して卑しいものではないということを言って商人道を説いてくれた。商人が利を求めるのは武士が禄を食（は）むのと同じなのだと言って、商人道の正当性を、あの封建社会の中で唱えたということを初めて知りました。武士が一番上で、農民、職人と続き、いちばん下が商人という士農工商の階級制度が厳然とあった社会の中で、学問のない農民上がりで京都の呉服商で奉公しただけの商人が、そういう事を唱えて商人に対して誇りをもたせた。そして同時に、商いをする者が踏むべき道を踏み外してはならないと説いたということを知り、内心忸怩たるものがあった私は本当に勇気が湧いて参りました。『そのように言ってくれる方があったとは』と嬉しく思って、事業家の道を一生懸命に歩き出したことを思い出します。ですから、石田梅岩が私に与えてくれたものは計り知れないと思います（後略）<sup>13</sup>と述べている。

稲盛はここで、梅岩の思想との出会いが創業直後の頃であったこと、そして、また 当時、自分は商人が、どちらかというあまり高い社会的地位におかれていないと見なされていると感じ、内心忸怩たるものがあった時に会った梅岩の思想が自分に与えてくれたものは計り知れなかったということを回想している。ここで稲盛が言っている「企業家もしくは経営者、もっと言葉を崩して言いますと商人、商いをする人」というのは中小零細の企業家を指し、資本主義における独占資本やまたは、カネの力で政治を左右するような大きな財界勢力を指すのではないことは容易に推察される。

また、稲盛は現代社会においては、社会的な基盤を築いているのが経済で、その経済を担っているのが企業人であるとすると、企業人は社会の規範となるべき倫理観、道徳観をもたなければならないにもかかわらず、それに悖（もと）るような企業人が世界的にもたくさんいるのは大変残念なことだと述べた上で、「特に現代の社会は、経済活動の結果、成立していますから、江戸時代の封建社会における商人の社会貢献度に比べて、何十倍、何百倍という影響力をもっています。それだけに、今日の商人道は江戸時代に梅岩が説いた商人道よりも、もっと立派で厳しいものであるべきなのです。にもかかわらず、270年経った今日でも、石田梅岩が石門心学を講舎で説いた頃から何も進歩していない、あるいは私たち企業人の身についていないということは、本当に悲しいことだと思います」<sup>14</sup>と述べている。

そして、正当な努力をしないで不当な利益を得たいという衝動が商人の世界にはあり、事実、そういう人たちがその当時も現在もあとを絶たない、そのために商人は、社会的に非常にさげすまれてきたのではないかと認識を述べ、「…その中で梅岩は『利を求むるに道あり』という趣旨のことを言っています。先ほどから何度も言っておられます天道、ただ一つの道、人間として生きる道です。商人が行う利潤追求の活動にも道がある、つまり、人間として人間らしく生きていくための道を踏み外さないで利益を求めるということを梅岩は言ったわけです。同時に梅岩は大変儉約をし

<sup>13</sup> 2000年10月15日「石田梅岩 心学開講270年記念シンポジウム」での発言。この記念シンポジウムは、社団法人心学参前舎（東京都足立区）が発起人となり、京都府亀岡市、京都新聞社、及び心学関係の諸団体によって組織された実行委員会が主催した。本稿では、日本財団図書館のWEBサイト上の発言録を引用した。

<sup>14</sup> 2000年10月15日「石田梅岩 心学開講270年記念シンポジウム」での発言。

て、自分で稼いだわずかのお金、浄財を貧しい人たちに配っています。その意味では、『利を求むるに道あり』であると同時に、自分が得た利益の使い方についても正しいあり方を考えたはずです。つまり『財を散ずるにも道あり』です。そして自分は赤貧を洗うような生活をしていたけれども非常に満足していたわけです。(中略) 禅の世界には『起きて半畳、寝て一畳』という言葉があります。起きているときは半畳の面積があれば生活できる。寝るときには一畳の広さがありさえすれば寝られるというものです。これは雲水が座禅を組むには半畳だけの場所さえあればいい、横になるには一畳の広ささえあればいいというように、修行に最低限必要な居住空間を表しています。『財を散ずるにも道あり』ということは、富を得ても、豪邸をつくるのではなく、『起きて半畳、寝て一畳』、つまり必要以上のことは求めないということだと考えています。つまり現在の社会でも経済人、企業家が儉約、質素、清貧ということをもし心がけているとすると、その人たちがつくってくれる経済的富で社会が豊に回っているのだから、彼らの生き様そのものが社会的な手本になり、企業自身も尊敬されるわけです。しかし、実際には心ない人が多いものですから、現在でも大きな問題になっているのだと思います<sup>15</sup>と述べている。

ここに稲盛の梅岩に対する考え方が述べられている。梅岩は「利を求むるに道あり」と説いたように利潤を挙げるにも人の道があるということを説いたと共に、儉約を奨励し、そして貯めたものは自分のためだけではなく貧しい人のために使った。稲盛はこれを高く評価し、「財を散ずるにも道あり」といい、儲けた人間が個人的にのみその富を使うのではなく、広く社会に還元してこそ、経済人は社会から尊敬されるような存在になれるということを述べている。

さらに稲盛は、「…石田梅岩が心学を説いたときから今日まで270年も経っていながら、実は何ら進歩していないのはなぜだろうと思うのです。梅岩が説いた心学は、われわれ商人が倫理観、道徳観をもつことを強く要求しました。ちょうど西洋で資本主義が勃興したとき、ワットの蒸気機関の発明から産業革命が起こってきた当時、それを担った初期資本主義の経営者たちは大変敬虔なプロテスタントでした。つまり、キリスト教の教える厳しい倫理観に裏打ちされた、敬虔な宗教心をもった方々だったわけです。それで資本主義は正常に機能してきたのです。日本でも元禄から明治へと展開していく中で、日本の資本主義勃興のときに商人道を説いた梅岩の心学を受け継いだ人たちが残っていたと思うのです。しかし、そのような倫理観に基づいた活動がそれ以降発展せず、衰退していったのは、ちょうど当時、西欧から近代科学が入ってきたことと関係があると思います。江戸時代にはすでにオランダの医学やいろいろな科学技術が日本に入ってきていました。明治になると、政府は国の近代化を促進するためにさらに西欧の文物を導入し、日本にもとからあったいわゆる伝統的なものをすべて否定しました<sup>16</sup>と述べている。

このシンポジウムで稲盛はパネルディスカッションの後に、「古き心学をたずね、新しき日本を拓く」と題して講演を行っている。稲盛は講演の後半では、経済成長至上主義から、「足るを知る」心への転換、今こそ、倫理・道徳の重要性を再認識する必要性を説いている。

<sup>15</sup> 2000年10月15日「石田梅岩 心学開講270年記念シンポジウム」での発言。

<sup>16</sup> 前掲

さらに今後の世界における日本のあり方として、これも稲盛が様々な場面で述べていることであるが、世界の素封家を目指すべきであると述べて講演を締めくくっている。「…日本が将来世界から尊敬を受けるためには、世界に貢献し、世界のために尽くす国にならなければなりません。つまりよき素封家としての国家を目指すのです。経済成長至上主義のもと、このまま欲望を際限なく肥大させ続けていけば、地球上のエネルギーや資源は枯渇し、環境汚染はとどまるどころを知らず、結局は取り返しのつかない事態を招いてしまうでしょう。私たちは、今こそ『足るを知る』生き方を学び直し、『足るを知る』国家とならなければなりません。そうして日本がこれからの時代を生きる範を示せば、世界の人々も尊敬をもってこれに倣おうとしましょう。心学を再確認することは、そのための一つの貴重なきっかけを提供してくれるものと私は信じています」<sup>17</sup>。

石門心学思想の中核は人の人たる道を知ることであり、その中で説かれた商人の道徳は質素・儉約・施行であり、直接、梅岩自身は禅語を使って「足るを知る」ことを説いてはいない。だが、梅岩は自身が富を広く社会に還元し繰り返し、利益を商人が貪らず、社会的に活かす（施行）必要性を説いている。稲盛は日本という国家自体をある意味で大きな商人国家（資本主義国）とした時に、世界で富の収奪合戦をこれ以上は行わず、国際社会に施行することの必要性を説いていることが確認できた。

## 5. 稲盛和夫の思想と石門心学の共通点―利益観と労働観―

前章においては、稲盛の労働観について確認した後、過去のシンポジウムでの発言から、稲盛が石門心学をどのように見ているかを確認した。本章では稲盛の労働観と利益観をまとめておきたい。利益観と銘打ってみたが、これは資本主義における利益とは何かという意味である。

すでに確認したことと重複するが、まず、稲盛は「働く」という行為それ自体に価値を見出している。労働は何かを生み出すから価値があるのではなく、人生にとって、労働そのものが尊いとする考え方である。ここは非常に重要な部分である。

労働価値説では人間の労働が価値を生み、労働が商品の価値を決めるとするが、稲盛は労働について価値を生み出すという観点からは全く論じていない。稲盛の労働観は働くことは人生の修行そのものであり、そして人間は「働く」という行為（＝「修行」）によって「心を高める」ことができるというものである。まさにこれは現代における「労働即仏行論」に通じるといって良いであろう。

先にも述べたが、筆者のみる限りにおいては、稲盛は公式の場での講演でも著作でも鈴木正三については全く言及していないのだが、稲盛の説く「働くこと」は「心を高めること」という考え方は、まさに正三の思想の現代版であるといっても良いであろう。

梅岩は主として商人が社会に存在する意義について説いたので、あまり労働の意味については説いていない。これは正三が主として仏教からの典拠によって自らの思想を説いているのに対して、梅岩はより儒学からの影響を強く受けていたからであろう。

利益観については、稲盛は石門心学の影響を受けている。先にみた、「…その中で梅岩は『利を

<sup>17</sup> 2000年10月15日「石田梅岩 心学開講270年記念シンポジウム」での発言。

求むるに道あり』という趣旨のことを言っています。(中略) 商人が行う利潤追求の活動にも道がある、つまり、人間として人間らしく生きていくための道を踏み外さないで利益を求めるということを梅岩は言ったわけです。(中略) その意味では、『利を求むるに道あり』であると同時に自分が得た利益の使い方についても正しいあり方を考えたはずです。つまり『財を散ずるにも道あり』です<sup>18</sup> という発言にみられるように、稲盛は商人の利益追求は道にかなっていないからならぬものだという認識を強くもっている。

さらに、稲盛は「財を散ずるにも道あり」と述べ、梅岩の「施行」について言及している。稲盛は自身の私財をなげうって稲盛財団を創設し、京都賞などの顕彰事業を行っているが、これも梅岩のいう「施行」の考え方を現代において実行していると解釈することが可能であろう。

本稿で取りあげた鈴木正三、石田梅岩、稲盛和夫の3人の時代、生没年、代表的著作、職業（業績）を表にすると以下ようになる。それぞれに時代は違うので、同じ条件で思想や業績を比較することはできない。だが、これらの人物の思想について大きく捉えて、論じることは全く意味のないこともないだろうと考え、これらの人物の思想から共通点を見つけ出して考察したい。

人名	時代（生没年）	代表的著作	職業・業績
鈴木 正三	江戸時代初期 (1579-1655)	『萬民特用』 『盲安杖』	元三河武士 出家して臨済僧
石田 梅岩	江戸時代 (1685-1744)	『都鄙問答』 『儉約齋家論』	呉服屋に奉公して丁稚・手代・番頭
稲盛 和夫	昭和-令和 (1932-)	『生き方-人間として一番大切なこと』 『京セラフィロソフィ』	京セラの創業 DDI (KDDI) の創業 JAL (日本航空) を再生 稲盛財団を創設

また、思想的なバックグラウンドと本人の思想、労働観、利益観を記すと以下になるだろう。

人名	本人の思想及び思想的背景	労働観	利益観
鈴木 正三	仏教（臨済宗）	「労働即仏行」論	「特利の益すべき心づかいを修行すべし」
石田 梅岩	儒学、仏教、神道		「人の利は武士の俸禄に同じ」 「勤勉、儉約、施行」 「利を求むるに道あり」
稲盛 和夫	仏教（本人が臨済僧・かくれ念仏からも幼少期に影響）、生長の家（谷口雅春）、中村天風、ニューソート思想他	「働く」ことは「修行」であり「心を高める」手段	「利を求むるに道あり」 「財を散ずるにも道あり」 「社会貢献重視」

<sup>18</sup> シンポジウムにおける発言。

正三と梅岩については、正三の死後30年後に梅岩が生まれている。このように見てみると利益観については多くの共通性がみられる。本稿で言及した正三は、江戸時代初期の武士から僧侶になった人物でありながら、商人の特利（利益）を否定せず、その心づかいこそが重要だとした。この正三の利益観を一步進めたものが梅岩の思想である。梅岩は商人の得る利益を武士の禄と同じものとして、社会における商人の意義を明らかにした。同時に、「勤勉」、「儉約」、「施行」を説き、商人が富を得る方法が道徳的なものでなければならないのみならず、富は貯めこむべきものではなく「施行」によって社会に還元することの重要性を説いている。

稲盛は直接、自らの「利益とは何か」ということそれ自体について言及しているという意味において利益観について説いた講演や書物は少ない。『京セラフィロソフィ』の中に「公明正大に利益を追求する」がある程度である。この中で稲盛は「投機や不正で暴利を貪り、一攫千金を夢見るような経営がまかり通る世の中ですが、公明正大に事業を行い、正しい利益を追求し、社会に貢献してくのが京セラの経営です」（稲盛、2014年、388頁）と述べている。本稿で梅岩について言及したシンポジウムでの発言を見たが、稲盛は梅岩の説くのと同一ような利益観をもっていると考えられる。つまり、「人間として人間らしく生きていくための道を踏み外さないで利益を求める」べきであるという考え方である。

労働観については、鈴木正三と稲盛には共通点がある。これは先に述べたのでここではくり返さないが、おそらく正三については詳しく知っていないであろう稲盛が、正三の「労働即仏行」論ともいうべき思想と極めて似た考え方をもっているのは、稲盛がこの世の営みを全て「修行」であるのとらえる仏教者（臨済宗）であるからだろう。

この3人のなかではっきりとした仏教者は正三と稲盛の2人だけである。しかも、この二人は、時代が異なるものの、臨済宗の僧侶であるという共通点もある。稲盛に関して厳密に言えば、出家したのは臨済宗（妙心寺派）だが、幼少期に鹿児島「かくれ念仏」の影響や谷口雅春の生長の家（ニューソート思想）の影響も受けて自身の思想を構築している。

稲盛の思想のうち、仏教的な部分のみに着目しても、様々な流れから影響を受けている。したがって、臨済宗の僧侶（修行者）としてのみ稲盛を論じるのは適切ではないのだが、労働観については「人生における労働は修行」であるという考え方と、正三の「労働即仏業」論に共通点を見出すことまでは可能だろう。

本稿でみてきた思想に共通する「利益観」はいずれも他人の作ったものを奪っても良いとする「収奪の思想」とは対極にあることである。労働なき富を是としなないという共通点もある。資本主義の本質を収奪、奪い合いとみるのか、社会を豊かにするための行為をお互いに行っていることであると見るか否かは根本的な問題である。

現実の資本主義には収奪・奪い合いの側面があることは否定できない。それどころか、現実の世界と日本においては、資本主義はその凶暴性をむき出しにしているともいえよう。しかし、稲盛の資本主義社会における利益観については、富を得たものの施行の重要性を説く部分まで含めて、石門心学思想の系譜にあるものということが言えるであろう。

## おわりに

以上、本稿においては梅岩の思想を簡単に紹介した上で、特に商人について述べられた部分を概観した。梅岩は江戸時代に社会全体における商人のもつ社会的機能の重要性を明らかにした。それは梅岩自身が商人であったことによる。と共に梅岩は当時の商人のあり方を肯定していたわけではなく、商人にこそ学問が必要であることを説いた。ここでいう学問とは読み書き算盤といった実務教育によって身につく学問を指してはいない。人間の道、今の言葉でいえば幅広い教養（リベラルアーツ）に裏打ちされた人間学や倫理観である。

梅岩にとって、重要なのは、正しい心、正直な心を持つことであった。梅岩はこれらは書物を読むことによってのみ身につくものではないという考え方をもっていた。しかし、無知であるということが、商人に道德心がないことの原因になっているのであるならば、商人も聖人の書物を読んで学ぶことが大事であると考えた。このような基本認識から、梅岩は商人こそ学問が必要であると説いた。

梅岩の場合、心の本性（自身に内在する善性）を知った上でそれを発揮して行くべきであるという考え方が基調になっているのに対して、稲盛は人間に内在する本性である善なる心を発揮するというよりも、善なる心を発揮し続け善き行動を取ることに由る魂の錬磨に重きをおいている。また、稲盛は労働を修行と考えているが、この部分については、稲盛は儒学の影響の強かった梅岩よりも仏教の影響の強い正三に近いということも確認した。

本稿の問題関心の一つは、梅岩の思想が今日も意味を持ちうるかということである。これについては、筆者は大いに意味を持つものであると考える。それは単に商人は道徳的であるべきだというような意味に留まるものではない。もちろん、第一義的には商人（企業経営者・資本家）が正直であるべきだということは論をまたない。だが、稲盛も梅岩についてのシンポジウムで「…ちょうど21世紀に入ろうとする今、科学技術、経済一辺倒ではなく、人間はどのようにして生きていくべきか、という『心』に立脚した議論が展開され、それをベースに企業人のあり方や社会のあり方が問われるような時代になったのではないかと思います。そのためにも石田梅岩の石門心学に学ぶべき点が大いにあると思います。（後略）」と述べているように、科学技術の進歩と経済合理性のみに価値を置く考え方からの転換が必要だという意味でも梅岩の思想を見直すことの意義はあるだろう。

梅岩自身の活躍した時代は近代以前であり、自然科学も資本主義も今日のように発展していなかった。したがって、梅岩の書物の中には基本的には政治批判や資本主義批判、文明批判と読めるものはない。その意味においては、今日の日本と世界の状況批判のために、梅岩をそのまま援用するのはかなりの無理があるようにも思われる。ここで稲盛が指摘していることは、心の豊かさ、充実というものをひたすら物質的なものの拡充のみに求めて来たこと、さらにはそれが世界の争いの原因になっているということへの問題意識である。このことを反省するためには、今後『心』に立脚した議論を喚起するために梅岩の思想が積極的に見直される可能性はあるだろう。

本稿で比較の対象とした梅岩と稲盛は基本的な相違点もあるが、稲盛自身が梅岩を肯定的に評価

しているように重なる部分も多い。日本が江戸時代に生んだ思想家石田梅岩が説いた、商人道徳、人の道、心と経済についての考え方、または社会全体の利益（富）は誰のものかということについての考え方は、今こそ世界レベルで再評価されるべき価値を持っているものであろう。このような思想を日本から世界に発信して行くことは、混迷の世界経済と秩序なき国際社会に対する本来の日本の関わり方であるのかもしれない。

### 【参考文献】

- 石田梅岩・足立栗園校訂（1935）『都鄙問答』岩波文庫  
石川 謙（1968）『石田梅岩と『都鄙問答』岩波新書  
稲盛和夫（2009）『働き方―「なぜ働くのか」「いかに働くのか」―』三笠書房  
稲盛和夫（2014）『京セラフィロソフィ』サンマーク出版  
柴田 実（1962）『石田梅岩』吉川弘文館（人物叢書）  
柴田 実（1971）『石門心学』（日本思想体系）岩波書店  
山本七平（2006）『日本資本主義の精神』ビジネス社  
山本七平（2008）『勤勉の哲学―日本人を動かす原理・その2―』祥伝社  
吉田健一（2010）「石田梅岩と稲盛和夫の思想―石門心学思想の今日的意義と稲盛哲学との比較―」  
（鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要 第2号・Pp.105-147）  
吉田健一（2012）「近代日本の経営思想とその特徴―労働観・利益観を中心として―」  
（鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要 第4号・Pp.99-150）